「寒水採石場」関係写真から見えるもの
―工部美術学校時代の大理石調査事業―

保坂涼子

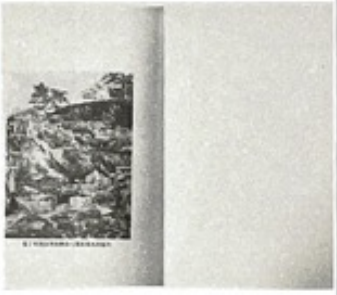
- 日本の希少大理石「寒水石」*（本報告に登場する「寒水石」とは、産地を主に茨城産と限定し表記する。）は、ラグーザが彫刻材料として買ったイタリア産大理石に匹敵するほど質の高い国産大理石であった。東京大学の工学部建築学専攻資料室に工部美術学校の当時の石材発掘事業について示す写真資料が残されている。（角田真弓『工学系研究科建築学専攻所蔵　伝播品台帳（一）』『工部美術学校所蔵資料』）この写真は工部美術学校彫刻科で授業後兼用教材として使用するための彫刻用石材を調査しているときの写真である。撮影者はイタリア人彫刻家で当時の工部美術学校彫刻科助手を務めていた人物と考えられるが写真について詳細な記録は残されていないという。
- 調査は明治12年（1879）7月～翌13年（1880）7月にかけてであるがガリアルドの茨城への出張は、10月と12月であったとみなされている。
- 清水重敦「建築写真と明治の教育」（『学問のアルケオロジー』参照）記載の本資料についての概要を以下に記す。「東大建築古写真」全365枚を被写体の内容により全体の分別を6つの分類とし、うちの大分類[一]「工部美術学校旧蔵写真」中に上記の資料が存在していた。工部美術学校関連資料はさらに全体が3つに分かれている。（ｉ）図学標本写真、計12枚、（ｉｉ）イタリア建築写真計96枚、（ⅲ）寒水石砕石場写真計20枚。このうち分類上の記号（ｉｉ）および（ｉｉｉ）には工部美術学校印が、（ⅲ）には工部美術学校印が押されている。清水によれば、「東大建築古写真」の台紙には全部で3種の印が確認されている。
- (1)工部局美術学校
- (2)工部美術学校
- (3)工科大学造家学教室之印
- (4)東京帝国大学工科大学建築学教室印
- (5)東京帝国大学工学部建築学教室
- 工部美術学校に関する資料には(1)および(2)の印を認めることができた。
- 今回新たに明治期の資料に当たって見つけた工部美術学校時代のイタリア人助手が石質調査のために茨城に出張に行った際の記述について報告する。

これまでの発表の経緯(2017-2020)

(1)2017年度の研究：報告「北村四海作《安田善次郎翁》の表面状態」(屋外彫刻調査保存研究会第17回総会・研究会 2017年7月15―16日 会場：武蔵野美術大学)
(2)2018年度の研究：報告「国産の大理石を用いた《安田善次郎翁像》のモニュメンタリティについて(屋外彫刻調査保存研究会第18回総会・研究会 2019年3月10日 会場：武蔵野美術大学)
(3)2019年度の研究：口頭発表『国書刊行会刊「近代日本彫刻史」における人名および事項索引作成』(デジタルアーカイブ学会第3回研究大会 2019年3月15―16日 会場：京都大学吉田キャンパス)
(4)2019年度の研究：ポスター発表「北村四海《安田善次郎翁像》についての折尺を使用した各部計測に関しての数値と保存状態について」(文化財保存修復学会第41回大会研究発表2019年6月22―23日 会場：帝京大学八王子キャンパス)

小山一郎
『日本産土木建築石材』
工学書院 1922(大正11)年

現在の砕石場付近



水戸　偕楽園　「叶玉泉」井筒(現在4代目)

北村四海は1900年パリ万博でアルマ広場開催のロダン個展で作品《イヴ》を見ている。その影響がロダンの《イヴ》のポーズを借用して制作した《嫉われた女》である。

『「ロダンと日本」展』
静岡県立美術館/愛知県美術館(編集)
現代彫刻センター(発行)　2001年

北村四海　1871-1927
《イヴ》　1915年　大理石　高さ41cm

『「ロダンと日本」展』
静岡県立美術館/愛知県美術館(編集)
現代彫刻センター(発行) 2001年

229頁より引用

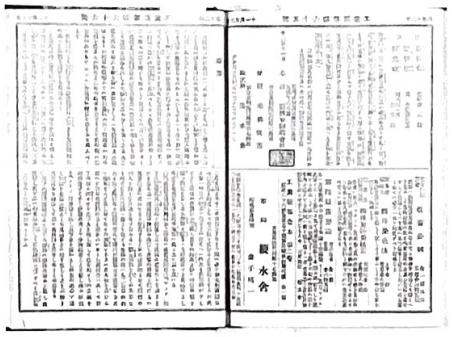
- 北村四海
  長野市に生まれる。幼名直次郎。宮彫師であった父・正信に従って木彫に親しむ。1893(明治26)年上京して木彫師・島村俊明(1853-96)に師事。1895(明治28)年の日本美術協会展に木彫《神武天皇》を出品し1等賞を受賞、銀行家・安田善次郎(1838-1921)が購入したことから、やがて安田の庇護に恵まれる。翌年牙彫師の石川光明(1852-1913)に師事。また小倉宗次郎(1845-1913)より塑造技法と大理石の星取り法を学ぶ。1900年のパリ万博に際しては、新潟竹太郎らとともに東京彫工会作家代表として渡仏、折から開催中のアルマ広場のロダン個展は当然見た筈で、その大理石彫刻に触発されたであろうが委細は不詳。ジョルジュパロー(原文ママ)に就いて大理石彫刻の研鑽を積み、牙彫を売って細口を凌ぐが、師恩を得て1902(明治35)年帰国。その後は創世記の大理石彫刻の第一人者として、太平洋画会で後進を指導するとともに、病躯を押して制作に励む。1907(明治40)年、東京勧業博覧会に出品された大理石の自信作《霧》を、不明朗な審査に抗議して破壊、美術界を震わせる。もっとも頭部と右手が失われた《霧》は、結果的にロダンのトルソ性になじまぬでもなく、この破壊行為を激情に駆られた結果とする通説は事実としても、作者は破壊後の作品の完成度も考慮して槌を振るっているかも知れない。
- 翌年の第2回文展では《春秋》が3等賞。第5・7回文展でも大理石作品で褒状を得た。1914(大正3)年の大正博覧会ではロダンの《イブ》と同工の《嫉まれた女》で2等賞、翌年の第3回文典で3等賞を得た《水の精》にもロダンの《ダナイード》を参照した跡が見える。1915(大正4)年の第9回文展には《橘姫》とともに出品された《イヴ》が3等賞を受賞、政府買上げとなる(東京国立近代美術館蔵)。第10回文展以降、文・帝展審査員を歴任、大理石の優雅な肌合いを生かした叙情的な女性裸像によって高い評価を得た。渡仏中の師恩が高じて東京にて没。嗣子正信(1889-1980)も日展の作家。

「長沼守敬とその時代展」
長沼守敬とその時代展実行委員会 萬鉄五郎記念美術館 一関市博物館(主催)
岩手日報社(共催)
2006年
千葉瑞夫編 長沼守敬年譜(一部改変し、記載)

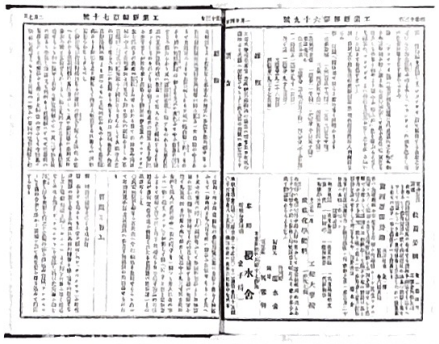
長沼守敬
とその時代展

年号	長沼守敬	時事
		工学寮付属の工部美術学校が創設。11月21日授業開始。ヴィンジェンツォ・ラグーザが来日、彫刻科の教授に当たる。
明治9(1876)19歳	2月1日通訳見習として在東京イタリア公使館に雇われる。	入学者に大脇長展、藤田文蔵、菊池錦太郎、佐野昭ら。
明治10(1877)20歳		6月第1回内国勧業博覧会開かれる。
明治13(1880)23歳	渡辺ユキと結婚、一関から母モトを呼び寄せ公使館内で所帯を持つ。	3月竹内久一、牙彫から木彫に転向する。
明治14(1881)24歳	イタリア留学のため横浜から出発。12月1日ヴェネツィア王立美術学校に入学、彫刻を学ぶ。12月3日箱根湯ノ沢で長男貞雄が生まれる。	6月30日工部美術学校彫刻科廃止(20名が卒業・就業)12月同校閉鎖。8月ラグーザは清原玉らを伴い帰国。

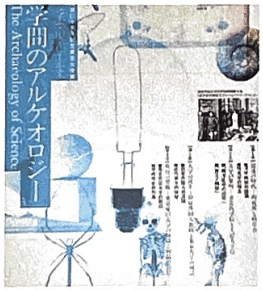
『工業新報第六十六號 明治12年 12月13日』
是迄我邦の寒水石ハ茨城縣より出すものを上等と驚したれども‥伊太利産よりも劣らざるべし
云大島工作局長ハ先日彫刻師と共二同縣へ赴かれ建探方と取調べらるゝ‥



『工業新報第七十號 明治13年 2月7日』
‥昨年来工部省より御雇の伊太利人「ガムアルチ」氏を派出され此虎の点検を命ぜられたりて
右地方中蕨訪村の中二て菅現岳井‥石質純白二三丈の絶壁殆ど同質なるもの‥



東京大学創立百二十周年記念東京大学展 学問の過去・現在・未来[第一部]「学問のアルケオロジー」
財団法人東京大学出版会(制作)
東京大学(発行)
1997年



- 清水重敦
- 「建築写真と明治の教育—東京大学大学院工学研究科建築学専攻所蔵古写真解題」252-263頁
- 明治19(1886)年、工部大学校造家学科第1期生の曽禰達蔵が、東京市内で今後需要が増していくであろう建築の装飾用石材を調査するために、常陸、上総、安房の調査を行った結果を工学会において報告している。その記事には、大理石(寒水石)の産地として、常陸の国(茨城県)多賀、久慈の二郡、とりわけ蕨訪村字屏風ヶ浦、真弓山に訪れたことが記されている。同報告に対する論評において、辰野金吾が彫刻業の弁を引き、白大理石は茨城県では得にくいのではないかと質問したことに対し、曽禰は次のように述べている。
- 「其質二就キテハ當テ工部省ノ所轄美術学校ニ彫刻教師トシテ聘セラレタル伊国人ガリアルチ氏之ヲ査鑑シテ伊国産ノ大理石ト相伯仲ストニヒタルコシ彼の常北地質編ニモ之ヲ記載セリ」
- 曽禰はガリアルディによる調査を知っていた。

画像使用不可